

◆関東羈旅 (カントウキリョ) No39
詩人・朔太郎と詩の道(群馬県前橋市)

広瀬川・詩の道

多くの近代詩人を育んだことで知られる前橋市。日頃より俳句や川柳には馴染んでおりますが、詩についても知識があればと考え、詩人・萩原朔太郎碑があるという前橋市を訪ねることにしました。JR 両毛線「前橋駅」から街の中心を流れる広瀬川を目指して歩いてみると、父親と娘が寄り添うような「ふるさとの思い出」像が目を引きまします。色々なストーリーがあるのかなと想像しながら進むと「広瀬川詩の道」入口に着きました。

前橋という名の由来は古く「厩橋(うまやばし、まやばし)」と推定され、江戸時代に前橋に改称されたそうです。広瀬川に沿う詩の道は、いろいろな近代詩人の詩碑があり鯉(かじか)泳ぎのように立ち止まり、詩を堪能しながら歩いていくと目的の前橋文学館に到着しました。

川柳・前橋市にて

- ・扉開け 感性広がる 詩の世界
- ・ふるさとの 思い出問うて 詩の道
- ・朔太郎 華開かせる ポエムかな

前橋文学館

前橋文学館の目の前には広瀬川に架かる朔太郎橋と、詩を語っているような雰囲気の前橋の像がありました。口語自由詩の確立者として、日本の近代詩史に比類なき足跡を残した詩人、萩原朔太郎。

前橋文学館の二階の常設展示スペースは、朔太郎が残した自筆原稿やノート、著作、遺品などが展示されており、感性豊かな朔太郎の全体像が見えてくるような気がします。短歌時代から口語自由詩の確立、郷土望景詩にアフォリズムなど、朔太郎の詩を読むたびに人生や社会、想いを詩の中に映し出す、朔太郎の巧みな技術とその功績を感じることができました。朔太郎の詩を十分堪能した後、近くの臨江閣に向かいました。

臨江閣は広瀬川・利根川の流れと松林に囲まれ、閑静な雰囲気を漂わせていました。近代和風の木造建築で、本館・別館・茶室があり、国指定の重要文化財です。その木造建築は、暖かなぬくもりを伝えているかのようでした。

- ・色づきて 風にあらがう 楓かな
- ・利根川の 秋風香る 松林
- ・過去の日 幻想追って 広瀬川
- ・水しぶき 河岸跡想う 交水堰

萩原朔太郎

萩原朔太郎は、1913(大正2)年に北原白秋の雑誌に初めて「みちゆき」ほか5編の詩を発表し詩人として出発しました。そこで室生犀星と知り合い生涯の友となり、1914(大正3)年に東京の生

活を切り上げて帰京し、室生犀星と山村暮鳥との3人で詩・宗教・音楽の研究を目的とする「人魚詩社」を設立し活動を展開。1916(大正5)年春頃から自宅で週1回の「詩と音楽の研究会」を開き、室生犀星と2人の雑誌「感情」を創刊。高度に成熟した散文詩や評論を発表し始め、1917(大正6)年32歳で第一詩集「月に吠える」を感情詩社と白日社共刊により自費出版で刊行。内容・形式共に従来の詩の概念を破り、口語象徴詩・叙情詩の新領域を開拓、詩壇に確固たる地位を確立し、森鷗外の絶賛を受けました。

自然豊かな前橋公園、隣接する東照宮などを散策しながら、この自然と地域が朔太郎の感性と詩への情熱を育んだのかなと想うと、朔太郎の人生を肌で感じたような気分になりました。秋風を浴びながら前橋の散策に満足感を覚え帰路につきました。

- ・自然かな 自然に似せた 池の畔
- ・古きゆえ 池より狭い 東照宮
- ・こだわりと 情熱示す 自費出版

「海員だより」